



オスマン帝国の凄さ

〜京都・家族旅②〜

20世紀初頭までの約600年間、栄華を極めたオスマン・トルコ帝国。その宝飾品や美術工芸品約170点が展示された「トルコ至宝展」は見応えのあるものだった。わざわざ京都まで出掛けて見る価値は十二分にある。

12年前、地図に掲載したように、日本に比べると今も拡大な領土を持つトルコの西部を15日間かけて旅をした。

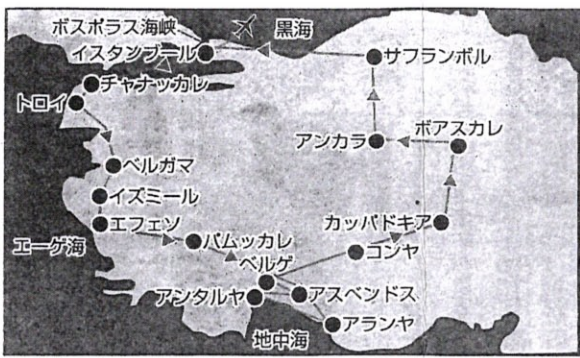
この首都イスタンブール(現在はアンカラ)のものはイスラム教寺院のブルーモスクをはじめ沢山のものがある。オスマン・トルコ帝国に占領される前にこの地域を支配していた古代ローマ時代からの首都であったイスタンブールにはキリスト教文化が数多く残る。しかし、当時を偲ぶものは遺跡しかない。誰もが知っている世界遺産のトロイの遺跡やエフェソス遺跡や石灰で自然に出来たパムッカ

今回トルコ至宝展を見ながら思ったことは、オスマン・トルコ帝国の凄さである。というの、15日間も旅をしても今回の至宝展の展示物は一度も見掛けなかった。それは展示品は持ち運びが出来るものだ。

もう一つの特徴は、聖パウロがバルナバと一緒にこの地方を伝道していることだ。その遺跡や、イスタンブールのブルーモスクの隣にある「アヤ・ソフィア聖堂(現在は、イスラム教寺院として使用された博物館として公開されている)には壁画にイエス・キリストの顔が描かれており、これも圧巻である。オスマン・トルコ時代に漆喰(しつ

これで見ることが出来る。これで解るように、「トルコ至宝展」では見ることのなかったオスマン・トルコ帝国の凄さを15日間の旅では十分に堪能出来た。今回のトルコ至宝展は、チュリップの宮殿と言われるトプカピ宮殿に展示されていたもので、これも素晴らしいものだが、実際にトルコを訪ねなければ見れない。

トルコを訪れた時、土産に買い求めたものは今までの海外の旅で求めたものの中で最も高かった保証付きのトルコじゅうたんで、トルコの国花であるチュリップ模様のものは前回写真で紹介したようにコーヒークップ、額皿、小鉢ぐらしかない。だが今回のトルコ至宝展では展示品などが買える訳でなく、絵ハガキと妻のチュリップ模様のスカーフぐらだった。いざれにせよ、オスマン・トルコ帝国の凄さが実感出来たこと



前回のトルコ旅のコース

聖パウロがバルナバと一緒にこの地方を伝道していることだ。その遺跡や、イスタンブールのブルーモスクの隣にある「アヤ・ソフィア聖堂(現在は、イスラム教寺院として使用された博物館として公開されている)には壁画にイエス・キリストの顔が描かれており、これも圧巻である。オスマン・トルコ時代に漆喰(しつ



遺跡エフェソスのメインストリート

ない世界遺産の数々もあわせて見ると、オスマン・トルコ帝国の凄さが良くわかった。オスマン・トルコの象徴ともいえるチュリップ模様の展示品。何しろチュリップの原産地がオランダと思っていたのだから、正直に言うところトルコ至宝展の数々よりも私にはトルコを訪れて見た世界遺産の方が魅力的なものであった。



右の柱後ろにあるヨハネ教会跡(この他西暦431年に公会議が開かれた聖母マリア教会跡があるように聖母マリアはトルコで亡くなったらしい)